

処女に捧ぐ者たちの宴

佐伯寿和2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある晩、母の寝室を訪ねたメアリーは思いがけず母、アリスの秘密を知る。そこで出会ったハートの女王。知らず、知らずメアリーは女王の戯れに飲まれていく。

メアリーを中心に飛び交う様々な『愛』の連鎖。それはいつしか『快樂』と名を変えて彼女たちの人生を複雑怪奇に染め上げていく。

そうして望まない再会を果たすメアリーと女王。メアリーが女王の正体に気づいた時、同時に自分の正体を知ることになる。

歌い手『Iuzさん』、楽師『奏音69さん』、絵師『RAHWIAさん』による作品『ROYAL SCANDAL』の二次創作です。

拙い解釈で描いた作品ですが、どうぞ最後までお付き合いください。

目次

処女の戯れ	1
三月の白兔は青い目をしている	7
猫の猫による猫のためのcocktail	15

処女の戯れ

『いったいママは何処どこにいるのかしら。』

ある日見つけたママの『秘密の花園』。どこまでも、どこまでもグルグルと潜ひそっていく、夢へと続く階段を『甘い香り好奇心』に誘よわれるままに降りていく。

もしも、あの階段を最後まで降りなかつたら……、

——私はまだママと一緒にいられたのかしら——

——ラヴィは私の側で笑い続けてくれたかしら——

——チェシヤは私を愛してくれたのかしら——

ある日の夜、ママの寝室を訪ねてみると、部屋にママはいなかった。窓の外から、星一つない空に上弦じょうげんの三日月お月様だけが私に微笑ほほえみ、私の顔を覗き込んでくる。

『もう随分と遅い時間なのに、まだ書齋しよさいにでもいるのかしら。』

戻ってくるのを待とうとベッドに腰掛けていたら、直すぐに蝶番ちやうつがいの擦すれる音がした。ママが帰ってきたんだと思って入口を振り返ったのに、口を開けたのは『見知らぬ扉』。

思わずベッドの下に隠れて様子を伺うと、そこから現れたのはやっぱりママだった。

ママは扉を閉めると、動かうごかされた鏡台きやうだいの上の『小箱』に何かをしまっていた。

ママは『小箱』に何かをしまおうとまた、扉の向こうへと消えていった。誰もいなくなったのを確認すると、私はベッドの下から這はい出て、スルスルと鏡台へと近寄ってみる。

鏡台の上の小箱は飾り気のない、地味なもの。鍵はない。私は箱を開けてみた。

どうしてだろう。これはママの物で、勝手に触ったら怒られるかもしれないのに、私は自然に『それ』を手を取っていた。

『それ』は、一本の鍵。

溝は単純で、柄の先端には羽の生えたハートの紋章。やっぱり見たことなんかない。

でも、その鍵を持っているとなんだか私が私になったような気がして、気が大きくなっていくの。

それに、なんだか全身がフワフワと夢の中にいるような気分にもなったわ。

真つ暗な空の三日月がニヤニヤと見下ろしている。

三日月は私の背中を押すように『見知らぬ扉』を照らし、私はされるがままに扉の前に立ってみる。

するとそれは、とても背が低かった。12才の私の背丈と同じなのだから、大人のひとは皆、腰を曲げなきやとても中には入れない。

調べてみると、ドアノブはあつても鍵穴はなく、引けば簡単に開いた。

すると、私の中の好奇心が囁いてきた。

『この鍵は何処の扉を開けてくれるんだろうね。』

もう私はこの鍵の正体が知りたくて、知りたくて仕方がなくなってしまうたわ。覚悟なんて必要なの？いいえ、楽しむだけよ。

振り返るとやっぱり夜空の中には三日月の微笑みだけが浮かんでいて、高みの見物とでも言うように私の様子を見守っているの。

私はハートの鍵を持って扉の向こうへと足を踏み入れる。

扉は底の見えない螺旋階段に続いていました。

階段の外壁にはオール・ヌーボーを意識したような細かい装飾が施されているのだけれど、照明が弱過ぎて詳しくは見えない。

一段、一段、端から端まで、足が僅かに沈む上等な赤い毛氈が敷き詰められていて、それはまるで王様か何かが玉座まで進むためにあるようなとても立派なものだった。

だからなんだか、新しい階段を踏む度にイイ気分になったわ。

でもそんな小さな遊びじゃあ、あつという間に飽きちゃうの。もつと面白そうなものがないか辺りを見回しながら進むのだけれど、これといって私の気を惹くようなものは見つからない。

ここにはあの月明かりも届かない。

2階の寝室から伸びていた階段は、もうすでに地下に潜っていてもおかしくない。それくらいグルグル、グルグルと下りていった。

どこまで下りても周りの照明は薄ボンヤリとしていて、見上げてみても見下ろしてみても、スツカリ暗闇に飲まれてしまっているの。入口も出口も見えない。だからちよつとだけ不安になってきちゃった。なんだかその黒い、黒い闇の中から誰かが私を見て笑っているような気がしたの。

そう思った矢先だった。

『あら？』

階段の終りが見えてきた。そしてその先には妙な扉が待ち構えているのが見えた。

入口の『小さな』扉とはうって変わって、巨人でも通れちゃうような『大きな』縦長の扉。そして、扉の頂点には鍵と同じハートの紋章エンブレム。それが私を見下ろしている。

私はやっぱり少しも警戒することなく扉に近づいてしまうの。まるでこの地下の主あるじにでもなった気分。これも、この鍵がそうさせているのしら。

すると、扉の向こうから人の話し声と生温かい吐息が交互に聞こえてきた。穏やかなのに熱くて、淡泊たんぱくなのに蜂蜜のように澀とろみのある声と吐息。

『さあ、お前も跪ひざまづいてワタシに誠意まこといを述べなさい。』

私を見下ろすハートが、そう言っているような気がしたの。

私は抗あらがえない。導かれるままに、差し込んだハートの鍵を回す。

『ガチャリ』

響いた重い解錠音かいじょうおんは私の心のある部分を刺激した。私はゆっくりとハートの扉を開け放つ。

そして始まる。止まらない悪夢快楽。

私は思わず目を瞑つぶってしまったわ。

だって、扉の向こう側から溢れ出るのは眩いばかりの黄金色の輝き。格差を知らしめるような荘厳な装飾。どれもこれも、私が今いる場所とは正反対の『力強さ』を持っていているんだもの。

そして、そこにいたのは獣の群れ。卑しくも忠実な様子を見せる彼らは、まるで狗の群れ。そして、群がる獣の中心に立つのは、さながら女王様。

狗たちは皆、仮面を被って女王様の愛撫に悶えている。次の愛撫を求めて喘いでいる。

女王様は身を寄せ、快樂に身を振る淫らな狗を見て笑っている。

「アナタは誰なの？」

狗だか兎だか分からない妙な『仮面』を被った男たちに囲まれる中でただ一人、『素顔』を晒す女王様。

私は、赤と黒の派手なドレスに身を包み、狗たちを弄ぶ、彼女の顔に見覚えがあった。

答えには、すぐに行き着いた。

それは、この地下室の入口で見かけたものと同じ。

「……もしかして、ママなの？」

扉を隠していた鏡台に写り込んだ私の顔と全く同じだった。女王様は、私がそうであるように、私を見て放心している。

どうやって『あの娘』はここに入ってきたと言うの？

なぜ『私』は鍵をわざわざ箱に戻したのかしら？

どうして『私』はその箱を化粧台の上に置きっぱなしにしたのかしら？

そして……、私に瓜二つな『あの娘』は……、誰なの？

『……そうよ。全部、私がそう仕向けたこと。』

『……そうよ。私は鏡の中の私。次はメアリーの番。』

まったく。魔女なんて呼ばれる女は根っからの性悪女ね。誕生日でもないのにこんな御馳走を超越すなんて。でもまあ、歓迎するわ。

『好奇心』に素直な私の娘よ。

「優しいのママはどいつ？」

アレが何か言ったかしら？まあ、そんなことはどうでもイイこと。

これこそ私が望んだモノなのだよ。サックスブルーのエプロンドレスを着た、この子こそ二人目の私^{アリス}。

「さあ、アリス。こちらにおいで。私の第二の心臓よ。私を楽しませておくれ。」

純粹無垢な、この舞踏会を彩る私のための晩餐^{ディナー}。

さあ、さあ、面白可笑しく踊っておくれ！

メアリーは走った。

ウソよ。ウソ、……ウソ。あの女王様はママと同じ顔の悪魔なんだわ。だって、ママはあんな歪^{ゆが}んだ顔で笑わないもの！私を『アリス』だなんて呼ばないもの！

そうよ、これもその悪魔が見せている夢なんだわ。

『助けて、ママ！』

「お前たち、私のディナーを捕まえておくれ。」

女王様^{悪魔}を取り巻く男たちは、弱った獲物で遊ぶように私を追いかけてくる。

走っても、走っても扉の外へ出られない。狗たちは私の背後にピツタリと張り付きながら囁きかけてくる。

「お待ちなさい。お待ちなさい。女王様^{アリス}の処女^{アリス}。」

「お待ちなさい。お待ちなさい。魔女^{アリス}のディナー^{アリス}。」

「お待ちなさい。お待ちなさい。快樂^{アリス}のハート^{アリス}。」

「違う。止めて。それは私の名前じゃないわ！」

享樂^{きょうらく}に魅入^{みい}られた狗^{本音}たち。彼らが、口から出まかせを積み重ねるほどに、彼らの欲望^{本音}は露^{あらわ}になっていく。

足を引っかけて、扉に凭^{もた}れ掛かるように倒れ込む。恐怖で足^{すく}が竦^{すく}んで動けない。

迫^{せま}ってくる狗たちの愛撫。私はもう、抗えない。

『ガチャリ』

重たい響きとともに、暗闇の中から突然差し伸べられる紳士の手。

私は迷わずその手に縋^{すが}った。

紳士はまるで魔法か何かのように、ひとつ飛びで長い螺旋階段を飛び越えた。

振り返る暇もなく、私は女王様悪魔の魔の手から逃れられた。

鼻から上を『仮面』で覆った、ドレスコードに忠実なタキシードの紳士。私を助けてくれた人は笑っていた。あの三日月のように。

紳士は私の手から鍵を受け取り、鍵穴のない小さな扉に鍵を刺す。

『ガチャリ』

重たい響き。甘い、シトラスの香り。

悪夢から逃げ果せた私の傍に、彼はいた。

「目が覚めたかい、エルシィ。」

彼は、あの三日月のような微笑みで私を見詰めていた。

彼の手には私の心を掻き乱すハートの鍵があった。

三月の白兔は青い目をしている

今日も今日とて蜜蜂たちは私のためによく働いてくれている。それもこれも私という『花』が魅力的だから仕方のないことよね。

客のいない午前0時、このお店で一番の支配者はマルガレーテでもあの娘でもない。私なの。

この店で一番魅力的な女、それが私。

『Bar・Masquerade』の舞台を飾るのも本当は私の仕事なのに、ママは気づいてくれない。もうとつくにママの時代は終わったのに。

だから私は店中の従業員を飼って私の方が上だって気づかせてあげるの。

なのにあの娘ったら、毎晩、毎晩、店じまいの度に歌の練習なんてしてるのよ。当て付けのつもりか知らないけれど、客のいないステージで喘いでバカみたい。能無しは大人しく掃除だけしてあげればいいのよ。

モツプをマイク代わりなんて上品じゃないことも私はしない。可愛い私にシンデレラは似合わないもの。

下品な仕事に用はないの。なんたって、私には昼も夜も惜しみなく働いてくれるたくさんの蜜蜂がいるのだから。

私はただ、可憐な薔薇を演じ続けていればいいの。

客だろうと、ママだろうと関係ない。昼も夜も関係ない。皆、同じ。ちよつと私が甘い声で囁けば誰も彼もが私の蜜蜂になるの。

だからアリス、そんなことをしても無駄なのよ。気づけないアナタは雑花。精々、タンポポやスマイレが関の山。客の目を惹く『薔薇』にはなれないのよ。

いづれ、この店は私の物になるんだから。それに気づけないアナタはやっぱり無能な雑花。

けれど、いつまで経っても、いつまで経っても、ママは私に主役の話をくれない。

仕事が終わればバーテンダーとカウンターで世間話ばかりして私

に見向きもしない。たまにあの娘の拙い歌を見て笑っているだけ。

本当に、どうかしているわ。きつと、お酒の飲み過ぎで頭がオカシクなっているんだわ。そうじゃなきゃ、私みたいな逸材を放っておくはずがないもの。

もうママには頼らない。こうなったら自分の手でモノにするしかないんだわ。そのためには、もっとたくさん駒が必要ね。

私が求める『快樂』の全てを叶えてくれる、弾丸のように強く、激しい蜂が。

そうして私が献身的努力に明け暮れているっていうのに、私は裏切られてしまったの。私は見てしまったの。

ママがあんな娘にレツスンをつけているのを。

『どうして?!』

「近々、ステージで歌わせるらしい。」

私の蜜蜂は、ママとチェスニーの会話を聞いたらしいのだけれど、私は信じない。

『何を考えているの?!』

これみよがしに、赤と黒の派手なドレスまで用意して。それじゃあまるで、『薔薇の花』じゃない!

数日後にはママが手配したデザイナーからポスターが届いた。あの娘のデビューを告知するポスターが――。

『冗談じゃないわ!』

私より不細工なくせに、キレイな華になろうとするあの娘が「嫌い。」

客を夢中にさせる愛嬌もなくせに、私を見下す舞台に立つあの娘が「嫌い。」

私がこんなに頑張っているのに、卑怯な手でママを誑かしたあの娘が「嫌い!」

派手で、下品で、真っ赤な花弁を着て浮かれているあの娘が「嫌い!!」

裸の身体に、蜜蜂たちがウルサイ羽音を立てて群がる。お尻を振つ

て仲間を呼び、花の宴はさらに熱を帯びる。

もつと強く！もつと激しく！もつとよ。もつと、もつと、もつと！！
銃身も弾倉も熱で溶かすくらいにメチャクチャに突き上げてイイのよ！！

可愛い喘ぎ声だつて聞かせてあげるわ。狂えるほどに気持ちよくしてあげるわ。

だからもつと、私の『望み』を叶えなさい！！

ダメね。まだなの。まだまだ私は満たされない。いくら弾倉に弾を詰めてみても、標的がいなきや名器の持ち腐れ。そうでしょ？

「ねえ、あの娘を可愛がってあげてよ。」

満たされた六匹の蜜蜂は私の命令に喜んで従ったわ。

あの下品なドレスに針を仕込んだり、ネズミの死体を入れたティーポットでお茶を飲ませたり、食事にイモムシを混ぜたり。

あの娘はこの店に友だちなんて真似はできないのよね。だからオモシロイ誰かに言い触らすなんて真似はできないのよね。だからオモシロイの。

本当は一番気に喰わない、あの下品なドレスを滅茶苦茶にしたいところだけれど、一応、ママが用意したものだから手を出さないであげたの。

でもね、これはただの『遊び』なんだから。私は蜂たちに『可愛がって』と命令したの。だからアリス……、嬉しい、嬉しい愛撫はこれからのよ。

六匹の蜜蜂に囲まれて、処女は何を差し出せば良いか分からない。オドオドしている内に男たちはナイフを差し出し、動けない花の蜜を吸って、吸って、吸い尽くすの。

どうかしら。私が撃った弾丸はアナタを熱くさせてくれたかしら？血を流したかしら？

ああ、アナタの悲鳴が聞いてみたかった。

フフフ。まったく、いい気味だわ。

これであの娘は店を出ていくものだと思ってた。でも、違った。とんだ、私の計算違い。まさか、顔色一つ変えずに残っていられるなんて。

まったく、なんてしごと娘なの？デビユーまでもう時間がないのに。だから根っからの召使いは嫌いよ。犯されるのも仕事の内だと思ってるんだから。

もつと、何か決定的な『モノ』を奪ってあげなきゃいけないんだわ。「チエスニー、チエスニー。聞いてくれる？私のデビユーに新聞記者が来てくれるの。私、新聞に載るかもしれないのよ！」

そうよね。アナタは我慢強い子だったものね。

でもアナタは言ってたわよね。お母さんに裏切られて逃げてきたんだって。

そうよね。同じことをしてあげればイイのよね。待っていて。私が最高の舞台を用意してあげるわ。

ああ、あの娘の『弱み』が手の内にあるなんて、なんて気持ちイイの。蜜蜂に囲まれているよりもずっと、ずっとイイわ。

閉店後、蜜蜂たちに人払いをさせて今は、チエスニーと二人きり。

「ねえ、チエシヤ。そんなに沢山のポスター、どうするつもりなの？」憎たらしい。ママの言いつけなんですよけど、なんて憎たらしいの。それが店を彩るかと思うと苛立ちで腸が煮えくりかえりそうだしわ。

……でも、それも今夜限りね。

「ねえ、チエシヤ。アナタは女がどんな声で啼くのか知ってる？」

私、決めたのよ。アナタの手であの娘を穢してあげるの。殺すよりはマシでしょ？

愛撫するなんてお手のもの。無防備な野蜂の上に馬乗りになれば、ほら、もう飛んで逃げることでできなくていい。もう、私のモノ。弾倉が熱くなつていくのが分かる。

ああ、早く。この撃鉄を起こして、私に引き金を引かせて。

「ねえ、私を愛してよ。」

仕上げに茨私のコトバの毒針でゆっくり、ゆっくり縫ぬい留とめてあげるわ。

ほら、こうやって体が触れあえば……、アナタも感じるでしょ？ 私の銃身カラダがこんなにもアナタを求めてるのよ。

だから私の命令コトバだけを聞いて——。

「キヤアツ—」

野蜂カレは可憐ワタシな花を突き飛ばした。拒んだ。

……そんな、……まさか、どうして。

私はただ、アナタにも私の『蜜』の味を教えてあげようとしただけなのに。私は誰も彼も夢中にさせた『花』なのよ？ 『魅力的な女』を望まない『男』なんている訳がないじゃない。

……だったらどうして？……何がいけないの？……どうして私じゃいけないの？

拒絶されるなんて初めての経験で、屈辱くつじよくよりも先に喪失感そうしつかんを覚えた。皆、私のモノのはずなのに。私のモノにならないモノがこの世にあるという失望。

ママの前ではいつも、ニヤニヤと厭いやらしい笑みを張り付けてるくせに。私を見下ろす目は、まるで枯れた花を見るように冷えきっている。

ママよりも、あの娘こよりも、私が劣おとるっていうの？考えられない。信じられない。皆、皆、みんな、どうかしているわ!!

『もう我慢ならない—』

「殺してっ—」

ナイフをポスターあの子の顔に突き立てる。そんなんじや、この怒りは収まらない。そう、もう限界よ!

「あんな女、八つ裂やきにして死んでしまえばイイのよっ!!」

この私が命令しているのに、男おとこどもは私を宥なだめるばかりで動こうとしない。

「落ち着け。殺しはマズイ。」

「そうだ。バレたらラヴィが捕まるぞ。」

あの女雑花を殺して、殺すのが男おとこどもで、どうして私が犯罪者犯れた花なの？ オカシイじゃない。どいつもこいつも、私をバカにしてっ!

ああ、どうしたつていうの。誰も彼も私の前から離れていく。何で？ どうして？ そんなにあの娘の命が大事？ 私の『蜜』よりも価値があるつていうの？

あつという間に私は独りぼっち。こんなに惨めなことつてあるかしら？

あんなに従順だった男たちはもう一匹だつていやしない。もう、誰も私を相手にしない。

引金を引いても聞こえてくるのはヒステリーを起こした私の金切り声ばかり。

どうして皆、あの娘の味方をするの？！

そうして無事にあの娘の晴れ舞台はやってきた。

憎しみで人は殺せない。それでも私はこのステージを見届ける。他にすることなんて何も無い。

キラキラと輝く彼女を見てみると、枯れた自分が余計に惨めに思えてくる。それでも私は見届ける。今の私は、あの娘から目を逸らせないの。私から全てを奪つていくあの娘から。

躰のなつてない子どもみたいに爪を噛んで、ただ立ち尽くしてる私はなんて醜いの？

スポットライトを浴びた雑花ごときに羨望の眼差しを向ける私はなんて醜いの？

観客のバカみたいなき声にさえ嫉妬する私はなんて醜いの？

私はここに居るのに、誰にも関心を持つてもらえない私は、なんて醜いの？！

こんなに醜い私は嫌い！

『嫌い！嫌い！嫌い！嫌い！』

もう、何もかもが嫌い！！

あの娘の舞台も残すところ一曲。期待膨らむ観衆、嫉妬に溺れていく私。

「最後の歌は私の大切な友人に贈らせてください。」

不意に、私の手を小さな手が包んだ。視線を滑らせた先にはあの頃

のメアリー。

「一緒に歌姫シンガーになろうと、ここで働くことを勧めてくれた貴女あなたとの約束。」

違う。途方とほうに暮れた私に生きる希望約を交わしてくれたのは、真っ赤な薔薇を手にしたあの子。

「ずっとここで、貴女を待つてるから。」

『ラヴィ、私、貴女が大好きよ。』

サックスブルーのエプロンドレスを着たアナタが、ローズピンクの私を愛してくれた。だから私は青の、アナタは赤のドレスを着ている。

……そうだったわ。

同じような境遇で、行き場のなかった私たちだから励まし合えた。手を取り合つて、笑っていられた。

でも、アナタを想うと憎い母の記憶が目を覚ますから——

『ガチャリ』

重たい響きとともに、スポットライトが落下する。あの娘この真上に。

……だめ。…だめよ。ダメ、ダメ、ダメツ、ダメツ!!

私は走つてた。あの娘こは、突然駆け寄ってくる私を見て目を丸くしている。それ以上のことなんか分からない。私はあの娘こだけを目に映して、飛び込む。

気がつくと、私の目の前には貴女アナタがいた。静かに見詰め合う私と貴女。

ねえ、メアリー。なんだか、胸が痛くて、痛くて堪らないわ。

蜜蜂相手に喘いでいた私も、嫉妬に溺れていた私も、痛くて堪らないの。

だからお願い、メアリー。もう一度だけ、この枯れたの胸に貴女の『優しい水』を聞かせて。

また、アナタだけを——

兎ウサギが死んだ。

こんな予定はなかつた。チエシヤオス猫は舞台袖から感じる視線に目を遣
ると、そこには女王様の帽子屋トが、冷えていく兎にさらに冷たい視線
を送贈ってっていた。

兎半端な女王の棺ひつぎは、赤と白の薔薇で埋められた。

猫の猫による猫のための cocktail

午前0時、それはドレスコードで理性を縛るMasqueradeの終わりを告げる時刻。

今夜もまたBarは『女たちの香水』で満たされて、酔わされた男たちはお金を手に、意中の女を探し回る。

女たちは店のための衣裳を脱ぎ捨て、男たちのための花弁に身を包む。より刺激的な男を求めて、無言で視線を飛ばし合ってる。煙草を燻らせて威嚇し合ってる姿が滑稽だわ。

女も男もそういう生き物。処女と童貞じゃなきゃ誰だって知ってること。

強姦なんてその延長線。気にする女は頭がオカシイのよ。

だから、私にも大胆になりたい時だってあるのよ。今夜だってそう。言い寄る女に靡きもしないで澄ましてる男を落としたい気分にもなるの。

アイツはいつもそう。余裕のある『微笑み』なんて見せられたら掻き立てられちゃうじゃない。

あの厭らしい三日月に賭けて。思い出の衣裳を着て、アイツのポーカーフェイスを崩してやるわ。

あの日の『歌』と『私』を添えて――

あの日の出来事は触れるだけで胸が痛くて、いつもいつも涙が抑えられない。

でも、そうじゃないとオカシイでしょ？薄情でしょ？

でも、安っぽい女のように泣かないわ。アイツが気に掛けてくれるようにしなきゃ『意味』がないもの。

「エルシイ、今夜もイイ声だったよ。」

「ありがとう。」

安っぽい男たちは気づかない。

「これ、前に君が欲しがっていたドレスだよ。」

「ありがとう。」

行き着く言葉はいつも色欲なんだもの。

「僕のも受け取ってくれないか？」

「ありがとう。」

これだからワンパターンの男たちに興味なんて湧かないの。女の身体にしか目がいかない駄狗には、営業スマイルと「ありがとう」の一言で充分。

だけど、こうして可愛らしくソファに座ってれば、その男たちが薔薇の付いた箱で私を囲んで、私の『女』を引き立ててくれるの。

だけど、私が沢山の男に囲まれていたって、アイツは素知らぬ様子。マルガレーテか客しか見ていない。悔しくはない。でも歯痒いの。

でも、まあいいわ。『誰にも靡かない』なら、他の女に盗られる心配もないものね。

「エルシィ、まだ上がらないの？」

「ママ、今日はもう少し飲みたい気分なの。ダメ？」

ママが引退してから、私の他に5人がステージに立つようになったけれど、実質、その中で私がN.O. 1。客の半分以上が『私の客』。

だからママも、私の我が儘なら許してくれる。

ただの給仕だった頃、掃除中に歌っているとよくママに怒られてた。あの頃のママは私が店の顔になるなんて思わなかったのよね。でも、懲りない私にレッスンを付けてくれたし、舞台も用意してくれた。

だから店を奪おうなんて思わない。『ママの店で歌う女』で十分。ただ、同じ舞台に立つ女が、私の上にいるのが気に入らないだけ。

「しよすがないわね。チェシヤに片付けを頼んでるけど、鍵だけはキチンと閉めておいてね。」

分かってるわ。むしろ、そのつもりだったから。

そして今は二人きり。それなのにアイツは私に見向きもしない。

「ねえ、チェシヤ。こっちに來て一杯付き合ってくれない？」

店を閉める準備ができたらと、アイツは掃除を続ける。

「……そう。」

言いながら手際良く一杯のカクテル作り、カクテルグラスに盛られ

たチェリーを添えて私のところまで持つて来ると、「バーは開けておくから、好きに言ってくれ」と言う。

そういうつもりじゃないのに。ただの口実がいつも彼の逃げ場になつてしまう。

それでも私は言われた通りに待つ。

待つのが退屈。飾りの箱で気分を紛まぎらわせるのも何だか違う気がするし。彼に用意してもらったチェリーは、口にすればするほどに悶々もんもんとする。

チェシヤは真面目で寡黙かまく。その上に愛想笑いが上手だから、身の上話を聞いても笑つてごまかされてばかり。

だからチェシヤのことを詳しく知つてる人は誰もいない。私もそう。5年以上一緒に働いてるのに。

たまに彼が、実体のない幽霊なんじゃないかつて疑つてしまう時があるの。ふと、彼の顔を思い出そうとすると、あの微笑みだけが背景の中にあるような錯覚おちいに陥るの。

分かつてるのは身寄りがなく、恋人がいないことくらい。ママと『噂』になつたことがあるけれど、『噂』を聞いた時のママの笑い方で半分は嘘なんだつて分かつた。

チェシヤは、私たちがこの店で働き始めてから間もなく、男の人に連れられてやつて来た。

その人も父親じゃないこと以外は何も知らない。

何も知らないのに、いつの間にか私はチェシヤにくつついて回るようになっていた。

初めは何となく、不思議な子だと見守つていただけ。

だけど、何でもソツなく熟こなすあの子とは違つて、私は不器用だったから。黙つて助けてくれる彼のそばにいるのが癖くせになつていたのかもしれない。

彼も彼で、私がそばにいることに何も言つてこないから、それに甘えていたのかもしれない。

本当にそれだけ。他意はなかつた。

だから何も起こらなかった。期待もしなかったし、『過ち』もなかった。

でも、あの事件以来、私だけが彼を意識するようになっていた。いつも傍にいた人が突然、いなくなる。彼がそうなるなんて思っていないけれど、彼女を想えば想うほどに彼が欲しくなる。

まるで針のない時計のように、巻いても、巻いても時間の分からない不安が付きまとうの。

どうしてだかは分からない。それでも、私はその『声』に抗えないの。

モップを持った彼が私のそばを通ったから言ってやった。

「ねえ、私を愛して欲しいの。」

ここまでハッキリした告白をすれば、彼だって少しは私に目を向けてくれると思った。

それなのに、彼は新しいカクテルを寄越して微笑むだけ。

どういうつもりなの？ 冗談だと思ってるの？ 遊びだと思ってるの？ バカにしないでよ！

飲めば飲むほどに『気持ち』は強くなっていくのに、それが彼に届く気がしない。しよせん、夢の中でしか叶わないのかしら。

グラスから立ち上る泡が、私の気持ちそのものみたいだわ。

「チエシヤは誰かを愛したりしないの？」

「私はチエシヤから見えてどういう女？」

「私に合う男はどんなだと思う？」

何を聞いても返ってくるのは新しいカクテルと変わらない微笑みだけ。

どうして？ 何を考えているの？ そう聞いてもどうせアナタは笑うだけなのよね？ だったら私はどうすればいいの？

身体が熱い。このままじゃ、酔い潰れちゃう。その前に『決着』をつけなきゃ。

もしも今夜もまた、彼の『アルコール』に私の『リキジュール』が濁されてしまうのなら、私はもう、二度と誰も愛さない。

逸らかされるのもう、真っ平っ！

彼が望むのなら、私は『何色のリキユール』でも構わない。処女に
だつてなつてみせる。

私は勢いに任せてカウンターに身を乗り出した。

「ママみたいなオバさんとじゃ物足りないでしょ？ 私が相手になって
あげるわよ。」

彼の襟を掴んで私の唇に引き寄せながら、『気持ち』を告げる。もう
カクテルを作る時間も、笑う余裕も与えない。アナタの『気持ち』を
教えてよ。

でも、彼は私が思う以上に冷酷な人だった。そこまで乱暴に扱われ
るなんて思つてもみなかった。

「……どうして？」

彼は私の手を力任せに振り払うと、私を睨み付けた。それでも彼は
一言も私をなじることもせず、静かにカウンターの片付けに戻ってい
く。

どういうこと？ 私の何がそんなに気に食わないの？ アナタの言い
たいことがサツパリ分からないわ！

打ち拉がれた私は、ソファに突っ伏してクッションに顔を埋める。

やっぱりダメ。忘れられない！ あの子も、貴方も！！

デビューの時に、初めてチエスに贈つてもらつた薔薇の髪飾り。私
のそばにこれがある限り、忘れられる訳がないじゃない。

その気がないなら、どうしてこんなものをくれたの？ 何が本当の貴
方なのか分からない。

胸が痛くて、痛くて堪らないわ。

私は三日月との賭けに負けて、眠りに落ちる。

シトラスの香水が私をまたあの夢の中へと墮としていく。

『ハートの女王様』は何人も裸の狗たちの全身を撫で、舐め、頬や胸
を弄っていた。

男たちは奴隷のように、されるがまま。

夢中だったのかもかもしれない。視線が合うまで、彼女の愛撫はネット
リと続いた。

視線が絡み合ってから初めて私は気づく。私は彼女を見ていたんじゃない。見られていたことに。

「アリス、こちらへおいで。」

そう。この、独善的な喋り方をしているのも私。怯える子どもの視線の先にいるのも私。そして、狗たちに仮面を被せて新しい遊びに興じているのも私。

女王様は、螺旋階段を隠す鏡台に映り込んでいたメアリーに似ているんじゃない。『鏡の中のそれ』が、女王様そのものなんだわ。

私はずっと、夢の中にいたんだわ。だったら私はまだ処女のままなのね。

ラヴィの蜜蜂に遊ばれた時も、こうして狗たちに囲まれている今も。私は処女のまま溺れていたんだわ。

『犯されもせず、穢れもせず。』

デビューの舞台でスポットが落ちてきた時も、幾つものチェリーを口にして悶々としていたついききまでも。私は二人に弄ばれてい
たんだわ。

『殺されることもなく、絶頂を覚えることもなく。』

私はずっと、ずっとこの夢の中で喘ぎ続けていただけ。

独り、自慰に耽っていただけ。

その快樂の虜になったのは私で、その快樂を与えているのも私。この心臓が止まるまで続く、女王様の遊び。

そしてまた、三日月の猫と青目の兎の夢へと続いていく――